

メーカーのための 「新人技術者」心得ノート

西畑三樹男 著

このところ過去に例を見ない厳しい就職氷河期が続いているが、この著書は、これから社会に出て技術者を志す工業高校生や理工系の大学生たち、あるいは、すでに企業や研究機関の技術部門の一員として、研鑽を重ねる若者たちに、将来への道しるべとして、ぜひとも読んでいただきたい1冊である。

著者の西畑三樹男氏はNTT武蔵野電気通信研究所において30年間、通信、電子、情報機器用材料、部品の実用化研究に従事し、約500件の技術論文を発表すると共に100件を越す特許を取得している。

その長年にわたって蓄積した技術開発の経験を基盤にして、1973年日本ベルパーツ（株）を設立し、電子機器材料、精密機構部品のR&Dとテストロニクス技術サービス業務のシステムを構築し、そのサービスを行っている。

この著書には、西畑氏が研究開発や生産の現場で、自ら汗と油にまみれながら体得した技術者魂といったものや、後輩を育むにあたって、日頃感じたことなどが率直に語られているが、なによりも、若者の成長を願う愛情に裏打ちされているがゆえに、説得力に富む。

本書の内容は、「第1章 技術者志望なら中小メーカーが面白い」に始まり、「第2章 技術者とはどんなものか」、「第3章 技術者になるにはどうすればよいか」、「第4章 技術のことだけ知っていればよいのではない」、「第5章 中小メーカーは研究開発が命である」、「第6章 製造技術と品質管理技術」、「第7章

会社とはどんなところか」、「第8章 これから技術者は何をなすべきか」と続く。

そして、それぞれの章がいくつかの小テーマによって構成され、そのテーマ自体が実践に役立つ「ひとこと」となっている。

また、随所に「column」というエッセイ欄が挿入されており、これらに西畑氏の人生哲学が垣間見える。

例えば、「技術は五感をフルに活用して学べ」の項では、西畑氏が若い頃、新しい分野の材料開発に没頭した経験から、「身体全体で覚えた技術はいつまでも忘れない。ここに技術習得の奥深さがある。先ず目でよく見る、そして手に触れて、音を聞き、時には味わってみる等の経験を、それまで覚えた学習というベースの上に積み重ねることである。これができてはじめて、有能な技術者として評価される」とのべている。

さる3月11日、突如として我が国を襲った東日本大震災は広範囲にわたって、大きな被害をもたらしたが、産業界においても、多くの企業が生産活動の停止に追い込まれた。

日本から世界へ向けた素材や部品などのサプライチェーンが寸断されたため、国内外の自動車、電機、精密機械などの業界が減産を余儀なくされるケースが続出した。

皮肉にも、世界的な規模で、日本企業の高品質な製品がいかに大きな役割を果たしているか、改めてその存在感を示す結果となった。

現在、官民を挙げて懸命な復興の努力がなされているが、これを機会に、地下資源に恵まれない日本としては、いままで以上に技術立国を目指す施策を進める必要がある。

多くの若者たちが、西畑氏の「心得ノート」に啓発されて、日本の「ものづくり」を支える有用な人材として、育ってほしいと願うものである。

(日刊工業新聞社、140頁、1900円) (前田次啓)